

語学研修を主目的とした外国の大学との学術交流について——豪州ニューカッスル大学訪問より

澤 泰人*

On Academic Exchange with Foreign Universities with the Aim of Language Training--- with a Report on a Visit to the University of Newcastle in Australia

Yasuto SAWA*

Abstract : There has been a growing need for technical college students to improve their foreign language proficiency as is required by JABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education). In particular, they are expected to develop presentation skills in foreign languages, which has prompted many technical colleges to enhance their curriculum of teaching foreign languages with greater emphasis on practical skills such as making presentations and discussing a wide range of topics in languages studied. For this purpose, an increasing number of technical colleges have entered into academic partnership with universities overseas, encouraging students to study foreign languages there.

In 2003, our college reached an agreement on academic exchange with the University of Newcastle in Australia. Following this, the first student went to the university to take 5 weeks of language training at its language center. The author was also given an opportunity to visit the university for the purpose of exchanging greetings with the staff and observing the lessons provided there as well, which is reported in detail in this paper.

0. はじめに

平成15年8月、本校は海外との学術交流推進の中核として、オーストラリアのニューカッスル大学と提携を結んだ。この提携は、現段階としては、本校の学生を当該大学の施設である語学研修センターに一定期間派遣し、集中的な語学研修を施すもので、英語のコミュニケーション能力向上さらには異文化体験を主眼とする。と同時に、本提携は、将来的にはニューカッスル大学からも学生を本校に受け入れ、日本語の学習をしつつ日本文化に触れてもらうという、双方向的な学術交流を目指すものである。

その第一歩として、翌平成16年10月、本校専攻科の女子学生1名がニューカッスル大学に初めて派遣され、約5週間の語学研修を受けた。その際、筆者も本校の使者として、また英語教室を代表して、学術交流実践にあたっての懇親および語学研修センターにお

ける実際の授業視察を目的として、約1週間、派遣された。本稿は、学術交流提携から学生派遣に至るまでの経緯、また筆者の現地での授業視察や学生の生活の報告を主目的とし、問題点等を探りながら、今後の更なる学術交流推進の指針を示そうとするものである。

まず第1章で、技術者に求められる外国語コミュニケーション能力について、いわゆるJABEE (Japan Accreditation Board for Engineering Education: 日本技術者教育認定機構) が目指すそれとの関わりから述べる。次に第2章では、提携後から学生派遣に至る経緯について、どのようなプロセスを経て実施に至ったかについて記述する。続いて第3章では、派遣先であるニューカッスル大学と語学研修センター等について、地理上および施設上の特徴について概観する。第4章においては、実際の語学研修カリキュラムや授業に触れる。第5章では、派遣学生の滞在先との関係について、主として契約と規約の観点から重要な点を述べる。そして最後に第6章では、今回の学術交流提携およびそれに基づく派遣を通して明らかになった、改善すべき点や今後の展望を述べて結語としたい。

(2005年11月24日受理)

* 宇部工業高等専門学校英語教室

1. 技術者に求められるコミュニケーション能力

最近、大学のみならず、高等専門学校でも学生レベルでの海外との学術交流が盛んである。特に工学系のそれらにおいては、将来的に国際舞台で活躍しうる人材育成の基盤として、外国語、とりわけ英語能力の向上を主眼とした、学生の海外の大学への派遣に一層の重点を置いている。また、JABEEの正式認定を受けた各高専が、策定した教育プログラム中に到達目標の一つとして明示されている「コミュニケーション能力」の向上に資するものとして、英語研修を主目的とした学生の海外派遣を充実させつつあるのも、当然の展開であるといえよう。本校もまた、JABEE正式認定校として「創造デザイン工学プログラム」を掲げているが、その中の項目の一つとして、以下のようなものがある。

「人間性豊かな技術者を目指すために：的確な表現力とコミュニケーション能力を身につけること」

ここでいう「コミュニケーション能力」とは、学生の母国語たる日本語によるもののみならず、外国語、特に英語による能力を指すことは言うまでもない。

では、この「英語によるコミュニケーション能力」とは、具体的にどのような能力のことをいうのであろうか。「国際化」という言葉すら古風な感の否めないほどのグローバルな今日、日本の技術者が海外で活動したり、また海外から外国人技術者を招聘して共同で研究や技術開発にあたるといったことは、もはや日常なことである。そこでは必然的に、専門的な事項も含めた英語によるコミュニケーションが展開されることになる。今日の、またこれからの日本人技術者にとって必要とされるコミュニケーション能力とは、こうした場面でそれなりに通用しうるものを指す。具体的には、専門的な内容について英語で理解し、議論し、さらには自己の考えや主張を発表する力のことである。場合によっては、会議等で多数の技術者を前に発表するということもあるだろう。

もちろん、こうした能力を学生時代に完全獲得させることは、時間的にも学生の本分である専門科目との兼ね合いから見ても、事実上不可能である。最終的には各学生が卒業して社会に出た後で、実際の現場におけるコミュニケーション上の実践経験で体得し、完成させていくしかない。したがって、高等専門学校、とりわけ専攻科卒業段階で修得しておくべき能力としては、そうした現場でのコミュニケーション能力の基礎となる技能を身につけさせることである。

そこで本校では、専攻科の全修了生に対して、TO

EIC400点相当の達成を課している。これはJABEEの審査においても正式に認められたレベルであり、学生の英語能力が公的に証明されることになる。本校においては、専攻科生は修了時には原則として全員が400点相当を達成しており、「技術者が現場で運用しうる英語能力の基礎レベル」としてのJABEE基準は十分に満たしているわけである。

これとの関わりから、今回の派遣学生を選考する際に、当然のことながら、TOEICのスコアが考慮された。派遣された専攻科の学生はTOEIC500点近くを取得していて、能力的には十分に派遣条件を満たしていたわけである。

こうした「技術者に求められるコミュニケーション能力」の基礎を実践的に獲得し、伸張させる場として、今回の学術交流の提携と学生の派遣が実現したのである。

2. 提携後から学生派遣に至る経緯

平成15年に学術交流の提携を結んで以来、実際の派遣を実現させるための準備が継続的に進められてきた。まず、最初の学生を派遣する時期であるが、提携を結んだのが当該年の8月であったため、事前準備等も含めると、年度中の実施は無理との結論に至った。そこで、1年の準備期間を経て、平成16年10月に、初めての学生派遣という運びとなったのである。

そこで、派遣前の最初の段階が、派遣学生の選定である。基本的に、派遣を希望する学生は、「語学研修願」を提出する。そこには本人が語学研修を希望する理由、および指導教員または学級担任の所見が記載される。当然のことながら、派遣候補学生は学業成績・人物ともに優秀で、本校における日常生活でも勤勉でなければならない。また、先述したように、公的な英語能力の証明であるTOEICスコアにおいて、一定のレベルが求められる。JABEE基準との関連で、本校専攻科修了生が400点相当を求められることを考えると、最低でも400点は要求されることである。いずれにせよ、以上のような要素を総合的に勘案し、派遣学生が決定されるわけである。

次に、本語学研修にかかる費用の問題がある。現在、ニューカッスル大学語学研修センターでの研修期間は約5週間で、その費用はおおむね次のようになっている。

- ①研修費用（5週間）：約118,000円
- ②滞在費用（ホームステイの場合）
 斡旋紹介手数料：約15,000円
 ホームステイ費用：3食付1週間で約14,000円
- ③交通費（往復交通運賃）：約70,000～100,000円

本校では、「宇部工業高等専門学校国際交流支援基金」による国際交流事業の助成を行っており、上記の金額に対し、援助限度額として 25 万円を補助している。派遣が決まった学生は、残りの諸費用を負担することになる。現在、当該助成に対する申請は年 2 回、5 月および 11 月となっており、希望学生は、申請書の他、指導教員または学級担任の推薦書、さらに派遣にかかる諸費用の見積書を提出し、選考会（面接）を経て、採否が決定されるという体制が整えられている。

続いて、派遣時期に関して言及しておく。上述のように、現在、本校が締結した学術交流の下で実施される語学研修は約 5 週間である。平成 17 年においては、ニューカッスル大学からは 9 つの期間が提供されていた。それを以下に示す。

- ①1 月 4 日～2 月 4 日
- ②2 月 7 日～3 月 11 日
- ③3 月 14 日～4 月 22 日
- ④4 月 26 日～5 月 27 日
- ⑤5 月 30 日～7 月 1 日
- ⑥7 月 18 日～8 月 19 日
- ⑦8 月 22 日～9 月 23 日
- ⑧10 月 10 日～11 月 11 日
- ⑨11 月 14 日～12 月 16 日

これを見ればわかるように、約 5 週間といえども、本校の学校日程との兼ね合いから考えると、なかなか難しいものである。専攻科学生ならともかく、本科生、とりわけ低学年に関しては、現状では夏季休暇中である⑥か、春期休暇中である③しかないであろう。もっとも、③については、後半の 2 週間ほどが、本校の授業日と重複してしまう。このあたりは、今後検討しなければならぬだろう。

次に、滞在先について軽く触れておく。滞在先については、主としてホームステイ・大学付属の寮・一般のホテルの 3 つが考えられる。しかしながら、学生が慣れない海外生活を送る上で多少の不安を感じることを考えると、完全に独立した形式であるホテルでの生活は好ましくない。また、英語能力向上の場合は何も研修の授業だけではなく、その他の生活の場で実際にその言語に接しながら学んでいくなど、外国においてはまさに四六時中である。その意味では、いったん大学を離れたら周囲との接触が絶たれてしまうホテル生活は、学習上も理想の環境とはいえないであろう。次に大学の寮であるが、これは他学生との交流もあるから英語能力向上にはよいのであるが、オーストラリアの（少なくともニューカッスル大学の）学寮は費用が結構高く、経済面でやや不向きといえる。その点、ホー

ムステイは費用も安く、食事の心配も不要である。加えて、ホストファミリーとの交流も常時あるので、英語能力の向上はもとより、一般人レベルでの異文化理解にも資するのである。したがって、総合的に見て、ホームステイを滞在先とするのが最適であろう。

最後に、現地到着後の移動手段について触れておこう。まず、日本からオーストラリアへは、空路シドニー空港へというのが一般的であろう。問題はこの後の交通手段で、シドニーからニューカッスルまでは、自動車で 3 時間近くかかるのである。しかしながら、実はこの移動方法が最も適切である。ニューカッスル大学では、語学研修受講学生をシドニー空港までミニバスで迎えに来てくれるのだ。ミニバスといっても、民間委託の大型乗り合いタクシーのようなもので、日本のワゴン車に似ている。10 人ぐらいまで運べるのであるが、筆者と派遣学生の時にも、空港から約 3 時間かけて、ニューカッスルまで運んでくれた。この間、他国からの語学研修受講生も乗り合わせているので、すでにこの段階で学生が友人同士になれるというメリットもあるのである。これに比して、列車や航空機による移動手段もあるにはあるのだが、列車は大きな荷物を抱えて乗るには不適切であるし、航空機は空港での手続き等が煩わしく、結果的に時間がかかるのだ。結局のところ、上述のミニバスで移動するのが一番で、これも出発前に語学研修センターにメール等で予約しておくだけでよく、非常に便利である。

以上述べてきたような形で、大学と連携を取りながら事前準備を進め、無事に渡豪の運びとなった。やはり最初の派遣ということで、何もかも一から作り上げていったので、むしろこの段階が一番苦労したかもしれない。事前準備だけで先方とのメールのやり取りは 70 通以上に及んだ。

3. ニューカッスル大学概観

オーストラリアの国土は広い。ニューカッスルは、直線距離にしてシドニーから 180km 程あるのだ。さてそのニューカッスルであるが、シドニーほどの都会ではないにしても、大型商店街や繁華街も存在する、生活には困ることのない街である。それでいて、静かな住宅街が点在し、緑も随所にあふれ、マリンスポーツも楽しめる美しい海岸まで自動車でも 20 分程度と、バランスの取れた街であるともいえる。人口は 35 万人、ニューサウスウェールズ州第 2 の都市である。また、夏は 20～28℃、冬でも 9～18℃と、気候的にも非常に過ごしやすい。

ニューカッスル大学は、そうした街の住宅街に隣接した、小高い広大な丘の上にある。研究部門で優れた成果を上げており、オーストラリア上位 10 傑にラン

クインしている。特に医学部の評価が高い。キャンパスはかなり広く、オーストラリアの全大学中 4 位の面積を誇る。また、学生数は 2 万 2 千人以上である。語学研修センターは、そのキャンパスの中央奥に位置する建物で、近隣には付属図書館や学生食堂、売店などが完備されている。また、語学研修施設だけあって、内部にはコンピューターラボや LL が 3 室完備され、学生がいつでも自由に利用できるようになっている。コンピューターラボでは、各種語学教材用ソフトが整備され、インターネットや E メールも利用できる。開館時間は午前 8 時から午後 7 時まで（金曜日は午後 5 時まで）と、学生の便宜を図っている。

4. 語学研修センターと授業について

語学研修センターでは、国外からの語学研修生に対する語学研修プログラムの期間として、10 週間と 5 週間の 2 種類を用意している。本校が現在利用しているのは後者であるが、授業内容そのものは、どちらも共通している。ここでは、本校学生が体験した 5 週間プログラムについて、記述しておくことにする。もっとも、筆者は数日間の授業を実際に見学し、その他の情報は現地スタッフとの交流の中で得たものであり、実際に研修プログラムの全てを経験したのは学生自身であるので、本稿ではそれらを総合した概説的なものとどめる。

まず、学生は初日にオリエンテーションを受ける。ここでは、現地での生活全般について、主としてカリキュラムや諸届等の教務関係と、ホームステイ上の注意などといった生活関係について説明がなされる。その後、いわゆるプレイメントテストが行われる。これは簡単なインタビュー形式により行われるもので、このテスト結果によって、学生はレベル別にクラス分けをされることになる。レベルは、下から順に以下の 4 つがある。

Elementary English: This course is designed to provide students with the English they need for living and feeling comfortable in an English Speaking Environment.

Intermediate English: This course develops communication and literacy skills to a level where students can function effectively in an English speaking environment.

Upper Intermediate English: This course develops language skills necessary for participation in a wide range of social and vocational activities.

During this course some work on English for Academic Purposes is introduced.

English for Academic Purposes(EAP): This course develops all language skills with an emphasis on skills relevant to tertiary study. The course encompasses most facets of academic requirements including essay and report writing, note-taking, preparation for tutorials, strategies for listening to and understanding lectures, library research instruction and written and oral presentations.

本校より派遣した学生は、プレイメントテストの結果、Intermediate クラスとなった。初日はここまでで大体終わるようである。

2 日目は、午前が授業、午後は後半が市街観光バスツアーとなる。まだニューカッスルの街に慣れていない研修学生たちを、バスで市街案内するのである。バスの運転手が解説をしながら、街とその周辺の主要ポイントを巡ってゆく。夕方 5 時ごろにキャンパスに戻ってきて、この日はこれで終わる。

3 日目から、いよいよ本格的に授業が始まる。授業は、毎日午前 9 時に始まり、午後 3 時に終わる。ただし、午後 3 時に終わるといっても、学生たちは図書館に行ってよく勉強する。それは、毎回レポートや宿題が課されるし、Upper Intermediate や EAP クラスになると、プレゼンテーションの機会が多く与えられるからである。総じて、学生たちは授業準備に余念がなく、非常に熱心であった。

さて授業内容であるが、語学研修センターという名称からして会話重視の授業を想像しがちであるが、そうではない。クラスにもよるが、内容は実に多彩である。互いの自己紹介から始まるロールプレイ、ヴォキャブラリービルディング、社会問題に関するディスカッション、放送内容を書き取るディクテーション、さらには自己の意見を表明するプレゼンテーションなど、単に話すだけでなく、読解力・語彙力や聴解力ひいては発表能力に至るまで、各分野が有機的に結合し、各能力が他の能力とのかかわりあいの中で総合的に伸長するように工夫されている。最も注目すべきは、学生の授業中の作業時間が多いことであった。プレゼンテーションの授業では、教員はむしろオブザーバーに徹し、自由に学生同士に討論させていたのが印象的であった。もっとも、こうしたことはやはりそれなりに文法知識がしっかり定着している学生でなければ出来ないようにも感じた。全くの英語初心者が取り組むには敷居が高いように思えた。

語学研修センターの特徴としてもう一つ上げておきたいのは、研修学生の出身国構成である。ほとんどが

アジア系であった。東南アジア、また、台湾や中国からの学生も多い。筆者は台湾やトルコ出身の学生と知り合うことができた。当然ながら、彼らにとっても英語は第2言語（あるいは第3言語）であるから、それぞれの母国語のなまりが強く影響を及ぼした英語を話していた。しかしながら、彼らは間違いを恐れずにどんどん話す。筆者が観察した、ある上級ディスカッションのクラスでは、筆者にも参加するよう求めてきたほどの熱心ぶりである。この意欲こそが英語能力向上の源なのだろう。日本人も多くいた。一般的に、日本人は間違いを恐れて英語を積極的に話さないといわれるが、ここでの日本人学生たちは、本校からの派遣学生も含めて、そうした雰囲気にもまれてか、非常に積極的に話していたのが印象的であった。これが、日本国内の、日本人ばかりのクラスの授業では出来ないのかもしれない。いずれにせよ、学生の大きい積極的な姿勢が好ましく感じられた。

5. 学生の滞在先との関係

本章では、学生のニューカッスル滞在中の、滞在先との関係について触れておくことにする。まず、先述のように、学生の滞在形態はホームステイが一般的であり、毎日をホストファミリーと過ごす。ホストファミリーは、それまでに何度も外国人の研修学生を受け入れてきた実績を持つ家庭が多く、その全てがニューカッスル大学の審査と認定を受けている。したがって、受け入れられる学生が傍若無人な振る舞いをしない限り、基本的なトラブルはない。ただし、当然ながらいくつかの決まりからくる一定の制約はある。それらは事前に研修学生に規約として送られてきて、学生はそれを了承した上で、ホームステイ先と契約を結ぶことになる。例として、主な規約の一部を以下に挙げる。

- 電話を受けるのはよいが、それ以外の用途については協議のこと。電話発信の場合は、発信用カードを郵便局で別途購入のこと。
- 学生は、ホストファミリーに支払った経費の各々につき、必ず領収書を受け取る（誤解を防ぐため）。
- 来客がある場合は、前もってホストファミリーと相談のこと。
- 大学行事や授業の関係等で食事が不要になった場合、前もってホストファミリーに知らせること（事前に支払われた滞在費に、食費が含まれているから）。
- 退去日は、少なくともその1週間前に通知すること。

いずれも常識的に考えれば当然のことなのであるが、何分、言葉の問題からコミュニケーションが不十分となり、誤解が生じやすいため、詳細な規約が定められており、事前に双方が署名することによってはじめてホームステイ契約が成り立つことになっている。しかし逆に言うと、それぐらいの詳細な規定があったほうが、学生としても安心ではあるだろう。

さて、ホスト先では、学生は完全な個室を与えられ、ベッドや勉強机など、基本的に必要なものは完備されている。食事はホストファミリーの手作りで、1日2食か3食を選べるが、大半の学生は、昼間を大学で過ごすこともあり、昼食は学食でとる。このため、1日2食のパターンが一般的である。

土日は大学が休みなので、ホストファミリーと1日中を過ごすことになるが、これがまた異文化体験となって、学生には有益なようである。本校からの学生も、バスケットボールの試合や劇場、また買い物やドライブにも同行できたようで、その過程で英語運用能力はもちろんのこと、さまざまな異文化体験が出来て、非常に有意義な日々であったと報告している。このような観点からも、また費用の面からも一般のホテルや大学付属の寮よりはホームステイの方が優れているといえよう。

6. まとめと今後に向けて

平成15年にオーストラリアのニューカッスル大学と学術交流の提携を結んだ本校は、続く平成16年における初めての学生の派遣によって、本格的な国際交流の道を歩みだした。それは単に英語能力の向上をもたらすだけでなく、異文化理解を通じた幅広い視野の獲得をも目指すものである。その意味では、工学系の専門科目を日常中心的に学ぶ学生にとって、人格の幅を広げる貴重な機会が提供されるということであり、今後ますます拡充していくべきプログラムであるといえる。

今後の課題としては、まず、交流の真の双方向化に向けて、相手先であるニューカッスル大学からの学生の受け入れを実現すべきである。先方の学生にとっては異文化理解になるし、本校の多数の学生にとっても、国際交流の一端を経験することができ、極めて貴重である。また、本校学生の派遣時期の問題も解決せねばならない。先述したように、現段階では本科生に関しては、夏期休業を利用するほかに、選択肢が大きく限定されているといわざるを得ない。授業数確保の問題もあるが、例えば現地で修得した単位を本校での単位に切り替えるなどして、派遣時期の弾力化と、履修内容の多様化を検討すべき段階に来ているのではないかと。短期であるにせよ、外国での生活体験を希望する

学生は意外に多いものである。英語そのものに対する興味や能力の伸長を図るためにも、機会の幅を広げてやることは、決して無益なことではあるまい。資金を

充実させ、さらに多くの学生がこのような機械を与えられるよう、全学的にこの問題に取り組み、整備してゆくことが望まれる。